

デフリンピック選手候補の競技環境と意識に関する アンケート調査報告書

平成21年6月

筑波技術大学 障害者高等教育研究支援センター

研究代表者 中 村 有 紀

目 次

はじめに	1
「デフリンピック選手候補の競技環境と意識に関するアンケート」調査概要	3
アンケート回答者のプロフィール	5
(1)性別	5
(2)年齢	5
(3)失聴年齢	6
(4)競技歴	6
(5)過去のデフリンピック出場回数	7
(6)ろう学校の在籍経験	8
(7)難聴学級の在籍経験	8
(8)現在の職業	9
1. 補聴器等の使用について	10
1-1. 日常生活における補聴器等の使用状況	11
1-2. スポーツ競技の練習時における補聴器等の使用状況	12
1-3. 主な国内大会における、競技中の補聴器等の使用状況	13
1-4. デフリンピックで競技中の補聴器等の使用が禁止されていることを知っているか	15
1-5. デフリンピックで、もし補聴器等の使用が許可されるとしたら使用したいか	16
2. 日常の練習や試合参加の実態	18
2-1. 普段の練習量	19
2-2. 普段練習するのは週末か、平日か	20
2-3. 練習時間帯	20
2-4. 練習場所	21
2-5. 活動形態	21
2-6. 出場した大会	22
2-7. 勤務と合宿・遠征が重なった時の扱い	23

3. 練習や試合にかかる費用.....	24
3-1. 競技スポーツにかかる費用のうち、自己負担しているもの	25
3-2. 競技スポーツにかかる費用のうち、自己負担金額が多いもの	25
3-3. 一年間の自己負担金額.....	26
4. コーチ、トレーナー等	27
4-1. 普段、指導やサポートを受けている専任のコーチ・トレーナーはいるか	28
4-1-1. 専任コーチ・トレーナーはどんな人か	29
4-1-2. 専任コーチ・トレーナーは、ボランティアか、有料か	30
4-2. デフリンピック代表チーム監督やスタッフ以外に普段指導を受けている専任コーチ・トレーナーを同行させたいか	31
4-3. 競技スポーツをやるにあたり、専任コーチ・トレーナーは必要か	32
4-3-1. 必要な専任コーチ・トレーナーはどんな人か	32
4-4. スポーツ競技の指導やサポート(技術、医学、栄養等)を受ける上で、聴覚障害と関連して特に困難に感じていること	33
5. 競技スポーツへの参加と意識	37
5-1. 現在のスポーツ競技を始めたきっかけ	38
5-2. 競技スポーツに参加する主な目的.....	39
5-3. 競技スポーツを行ってきて苦労したこと.....	40
5-4. デフリンピック選手候補として特に励みになること	41
6. デフリンピックの課題.....	42
6-1. デフリンピックとオリンピックでは何が違うと思うか	43
6-2. デフリンピックとパラリンピックでは何が違うと思うか。.....	43
6-3. デフリンピックや聴覚障害者スポーツの今後についての要望や夢.....	44

はじめに

第 21 回台北デフリンピック夏季大会まで残すところあと数ヶ月となり、日本代表選手団やそれをサポートする多くの方々の期待も日々高まっていることと思います。しかしながら現在、日本におけるデフリンピックの周知度は、オリンピックやパラリンピックと比べて極めて低く、聴覚障害者のスポーツ文化についての研究もほとんどされていない状況にあります。デフリンピックを多くの国民に知ってもらうことが、聴覚障害者スポーツの意義と魅力を知ってもらう第一歩となることは言うまでもなく、参加する選手達にとっても大きな力になります。

我々は、障害者スポーツや聴覚障害学を研究する専門家として、デフリンピックの今後の行方や、聴覚障害者スポーツのあり方について、大きな関心を持っています。聴覚障害者にとってのデフリンピックは、オリンピックやパラリンピック同様、卓越したパフォーマンスを競い合う最高の大会として位置付けられています。また、デフリンピックは、世界中の聴覚障害者がスポーツイベントを通して交流を深め、その文化とアイデンティティを形成していくというところに大きな意味を持ちます。その姿はオリンピックやパラリンピックと同じように、観る者に感動を与えるものに違いありません。我々は、これまで、全国ろうあ者体育大会や、全国聾学校陸上競技大会等を視察してきました。聴覚障害者のスポーツに対するバリアは他の種類の障害と比べ低いと言われ、見た目には健聴者とほぼ同じルールで、同じように競技することが可能です。しかし一方、そこで目にした選手たちの競技力は明らかに低く、観るものを惹きつけるような迫力や洗練されたパフォーマンスを、残念ながら多くは観ることができませんでした。

昨年、北京パラリンピックが開催され、さまざまな障害のある選手達が熱戦を繰り広げる姿が新聞やテレビで連日報道されました。今回の大会で特に言われたのが、急激な競技性の高まりです。リハビリの一環として始められた障害者スポーツも、今や0.1秒を激しく競い、メダルには報奨金が与えられ、プロ選手も現れました。デフリンピックの日本代表選手も、今回の台北大会から推薦基準が厳しくなり、メダルを獲得できる選手のみを派遣するよう、変わりつつあります。ろう者仲間でのスポーツ競技会としてろう者の手により始められたデフリンピックは、今後どこへ向かっていくのか、行政や一般の人々の関心を惹きつけ、理解と応援を得るためには何が必要なのか、本気で考える時期が来ています。

そこで今回我々は、まず第一段階として、デフリンピック選手候補を対象としたアンケート調査の実施を計画しました。これまで国内では、聴覚障害者アスリートの実態について客観的に研究されたものはほとんどなく、デフリンピックについての周知度、さらに聴覚障害者のスポーツについての理解度は著しく低いといえます。残念なことに、この現状は健聴者だけでなく聴覚障害者の間でも同様です。筑波技術大学産業技術学部は、聴覚障害者のための学部であり、在校生や卒業生にもデフリンピックを目指す選手が数多くいますが、新入生に、「デフリンピックを知っていますか？」と尋ねると、1

～2割は「聞いたことがない」と答えます。学生の約半数が普通学校からの入学者ですから、現状では当然のことかもしれません。

本調査は、全日本ろうあ連盟スポーツ委員会および各スポーツ競技団体の協力のもと、デフリンピック選手候補の競技環境と意識について、151名の聴覚障害者アスリートからアンケート回答を得ることができました。補聴器の使用、練習環境、障害による困難や、彼らがデフリンピックに望むことなど、これまで、漠然とわかっていたけれど、具体的に示されることのなかった聴覚障害者アスリートの現状について、多くの情報を得ることができました。同じ障害者スポーツでも、パラリンピックは、競技のために各種の装具や車椅子、伴走などによって足りない部分を補って臨むのに対し、補聴器の使用を禁止し、敢えて「聴こえない」平等の下に競い合うデフリンピックを理解できる貴重なデータとなりました。

調査にあたり、快くご協力いただいた全日本ろうあ連盟スポーツ委員会および各スポーツ競技団体の皆様に心より感謝申し上げます。また、選手の皆様からいただいた手書きの回答からは、当事者の本音を真剣に記述して下さったことが伝わってきました。この場を借りてお礼申し上げますとともに、今後益々の活躍を心よりお祈り申し上げます。

平成21年6月

筑波技術大学障害者高等教育研究支援センター

研究代表者 中村 有紀

「デフリンピック選手候補の競技環境と意識に関するアンケート」調査概要

(1) 調査目的

本調査は、日本の聴覚障害者アスリートの実態を把握し、今後の聴覚障害者スポーツの競技力向上と振興のための教育および活動に資する基礎的資料を得ることを目的とした。

(2) 調査対象

第 21 回夏季デフリンピック(台北 2009)選手候補
第 17 回冬季デフリンピック(ハイトラス 2011)強化指定選手

(3) 調査期間

2009 年 2 月～5 月

(4) 調査方法

調査用紙の配布と回収は、以下の1)～3)のいずれかの方法で行った。

- 1) 各競技団体を通じて選手へ郵送し、記入後、郵送で回収
- 2) 選手へ直接郵送し、記入後、郵送で回収
- 3) 各競技団体の主催する合宿等で配布し、記入後、回収して郵送

(5) 回収率

配布数	212
有効回収数	151
回収率	72.2%

(6) その他

- ・アンケート調査は無記名で行った。
- ・調査データは、集計したものを報告することとし、記入した個人が特定されないこと、調査データを研究および教育以外の目的に使用しないことを周知した。

(7) 調査研究実施グループ

筑波技術大学 障害者高等教育研究支援センター	中村 有紀(実施責任者)
同	及川 力
同	大杉 豊

本調査は、筑波技術大学平成 20 年度競争的教育研究プロジェクト事業で採択された研究テーマ「デフリンピックに見る聴覚障害者のスポーツ文化と今後の行方」に対し配分された資金により行った。

(8)調査研究協力

財団法人全日本ろうあ連盟スポーツ委員会
日本ろう者武道連合空手部
日本ろう者武道連合柔道部
日本ろう者バドミントン協会
日本ろうあバレーボール協会
日本ろう者水泳協会
日本ろうあ者卓球協会
特定非営利活動法人日本デフバスケットボール協会
日本ろう者テニス協会
日本ろう者サッカー協会
日本聴覚障害者陸上競技協会
日本ろう者ボウリング連合
日本ろう者スキー協会

アンケート回答者のプロフィール

(1) 性別

表 1 性別

性別	男性	女性	無回答	計
人数(人)	86	63	2	151

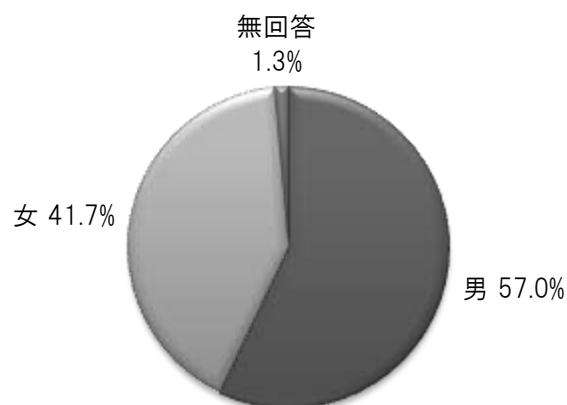


図 1 性別

(2) 年齢

表 2 年齢

年齢(歳)	10～19	20～29	30～39	40～49	50～	無回答	計
人数(人)	23	82	36	6	2	2	151

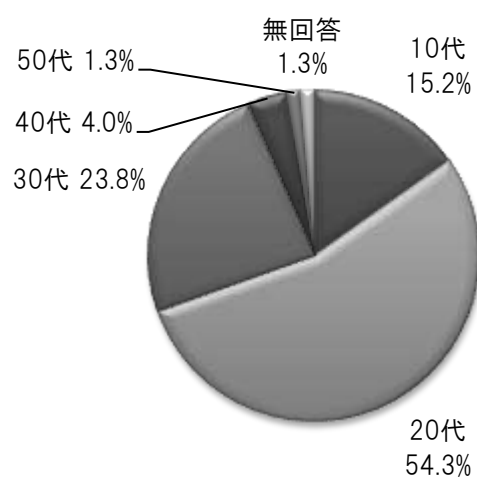


図 2 年齢

平均年齢は 26.7 ± 7.5 歳。
 最年少は水泳競技の 13 歳、最高齢はカーリングおよび柔道の 59 歳であった。

(3) 失聴年齢

表 3 失聴年齢

失聴年齢(歳)	0～3	4～6	7～	無回答	計
人数(人)	139	1	5	6	151

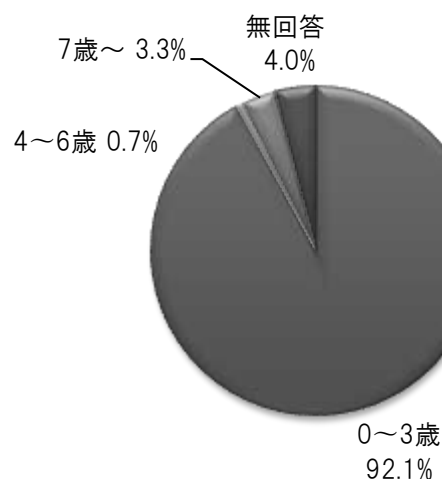


図 3 失聴年齢

回答者の 92.1%が、音声言語獲得前の 0 歳～3 歳に失聴した聴覚障害者であった。

(4) 競技歴

表 4 競技歴

競技歴(年)	～1	2～5	6～9	10～19	20～29	30～	無回答	計
人数(人)	8	8	26	63	20	2	24	151

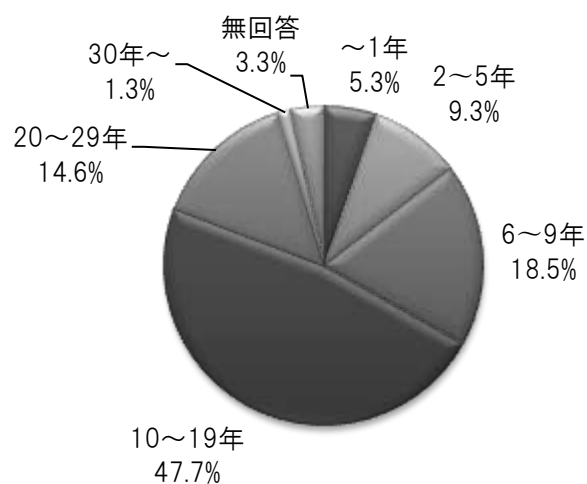


図 4 競技歴

平均競技歴は 12.2 ± 7.0 年。

競技歴が 1 年または 1 年未満と回答した 8 名は、すべて女性で、女子サッカー、ビーチバレーボールの選手であった。両種目は、2005 年のメルボルン大会から加わったもので、日本は台北大会が初出場となる。

(5)過去のデフリンピック出場回数

表 5 過去のデフリンピック出場回数

出場回数(回)	0	1	2	3	4	無回答	計
人数(人)	83	35	9	5	1	18	151

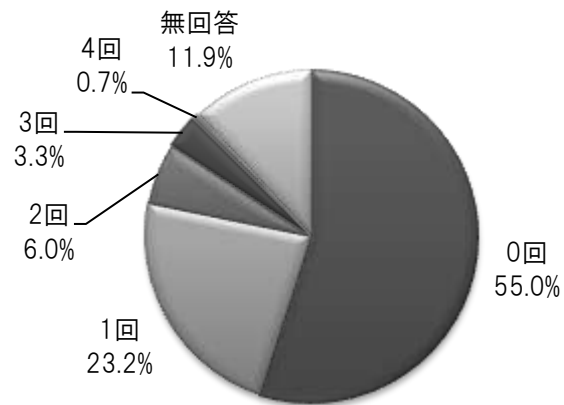


図 5 過去のデフリンピック出場回数

回答者のうち、55.0%がデフリンピック未経験の選手であった。

(6)ろう学校の在籍経験

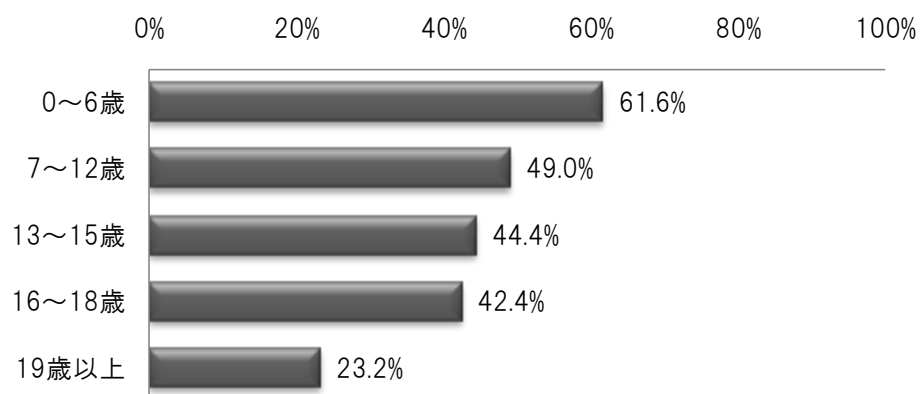


図 6 ろう学校の在籍経験

ろう学校に 1 年でも在籍した経験のある年齢を示した。全体の約半数が小学部までに在籍経験があり、中学部以上になるとやや減少する。

(7)難聴学級の在籍経験

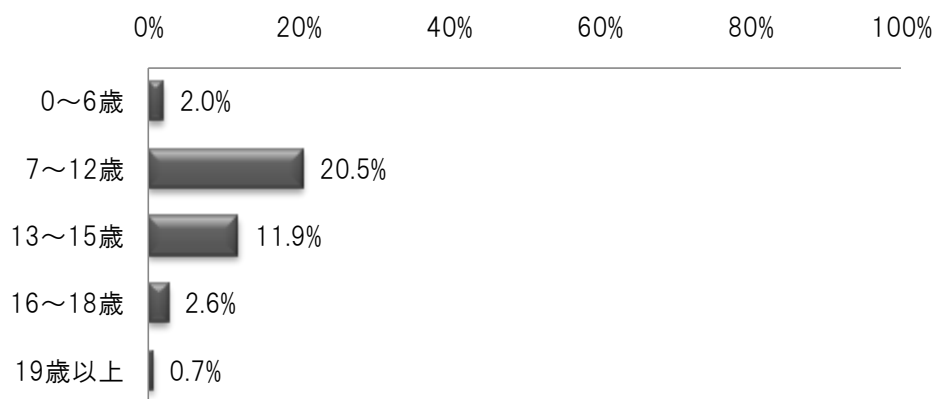


図 7 難聴学級の在籍経験

1～2割が小学校および中学校で難聴学級に在籍した経験がある。

(7)現在の職業

表 6 現在の職業

職業	人数(人)
会社員	77
学生	39
公務員	14
無職	5
パート・アルバイト	4
その他	3
プロ選手	1
団体職員	1
自営業	0
無回答	7
計	151

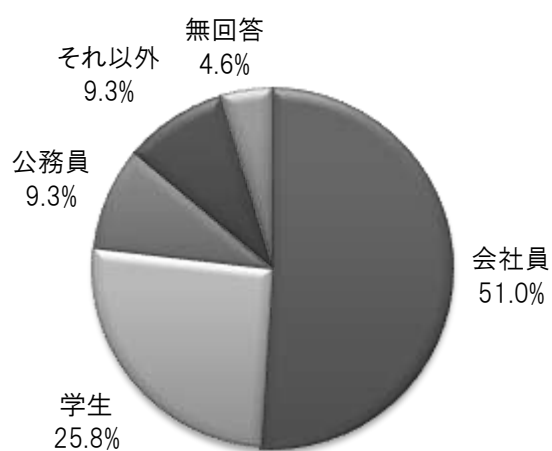


図 8 現在の職業(会社員、学生、公務員の割合)

回答者の職業で最も多かったのは、会社員(51.0%)であった。次いで、学生(25.8%)、公務員(9.3%)であった。

1. 補聴器等の使用について

補聴器等の使用状況について、日常生活の他、練習中、試合中の状況に分けて聞いた。日常生活では4人に3人が補聴器等を使用し、聴力を補っている。一方、競技の練習時に補聴器等を使用するのは4人に1人程度に減少する。最も大きな理由は、補聴器が水濡れや衝撃に弱い精密機器であり、スポーツ活動には不向きな場合が多いことである。また、今回の調査対象は、デフリンピック選手候補であるため、デフリンピックで補聴器の使用が禁じられていることから、補聴器を使用しない環境でのスポーツに慣れるため、普段から使用しないようにしているという回答も多かった。

さらに、聴覚障害のあるスポーツ選手の、聴覚障害とスポーツに関する考えを問うため、デフリンピックで補聴器の使用が認められるとしたら使用したいか、という問いを設けた。これに対しては、すべての選手が聴力に差のない公平な立場で戦えるという、デフリンピックの意義について言及し、使用が認められても補聴器は使用したくない、という考えが述べられた。一方、少しでも音を聴くことでプレーやモチベーションの向上が期待できるため、補聴器を使用したいという考えの選手もいることがわかった。

1-1. 日常生活における補聴器等の使用状況

表 7 日常生活における補聴器等の使用状況

	補聴器	人工内耳	なし	その他	計
人数(人)	115	2	31	3	151

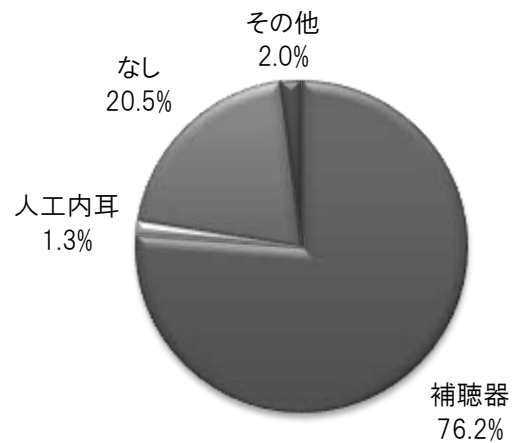


図 9 日常生活における補聴器等の使用状況

日常生活で補聴器を使用している選手は 76.2%、人工内耳は1.3%であった。20.5%はいずれも使用していないと回答した。

1-2. スポーツ競技の練習時における補聴器等の使用状況

表 8 練習時の補聴器等の使用状況

	使用する	使用しない	その他	計
人数(人)	39	108	4	151

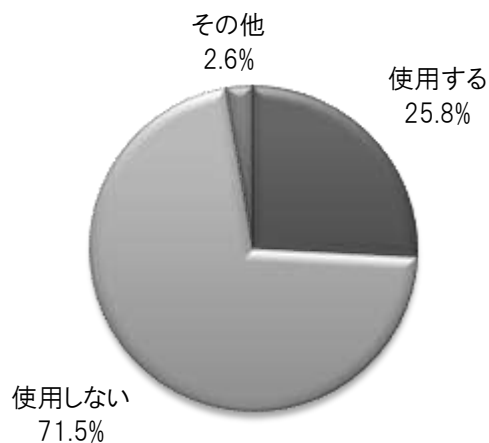


図 10 練習時の補聴器等の使用状況

練習時に補聴器を**使用する**選手は 25.8%。



【理由(自由記述の内容)】 ()内の数字は、類似した回答の数

- 健聴者とのコミュニケーションのため。(16)
- 音を少しでも聞くため。(スタート音、ボールを蹴る音、掛け声など) (10)
- 音がないと不安、日常生活同様に使用する。(7)

練習時に補聴器を**使用しない**選手は 71.5%。



【理由(自由記述の内容)】 ()内の数字は、類似した回答の数

- 汗や水、砂、あるいは衝撃で壊れるため。(33)
- デフリンピックでは使用禁止なので、それに慣れておくため。(30)
- 衝突による危険を防ぐため。(9)
- じゃま、音は必要ない、使用しない方が集中できる。(20)

71.5%は練習中補聴器を使用しない。日常生活では補聴器を使用するが、スポーツ活動中は外すことに関する大きな二つの理由が挙げられた。それは、汗や衝撃で補聴器を壊す恐れがあることと、デフリンピック等の大会で補聴器の使用が認められていないことである。一方、練習中も補聴器を使用する者の多くは、健聴者とのコミュニケーションを目的としていた。

1-3. 主な国内大会における、競技中の補聴器等の使用状況

表 9 競技中の補聴器等の使用状況

	使用する	使用しない	その他	無回答	計
人数(人)	29	106	14	2	151

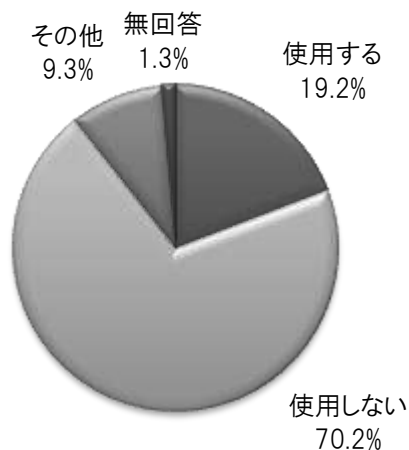


図 11 競技中の補聴器等の使用状況

競技中に補聴器を**使用する**選手は 19.2%。



【理由(自由記述の内容)】 ()内の数字は、類似した回答の数

- 音による情報を得るため。(スタートの合図、ネットに当たる音、指示の声など) (13)
- 健聴者とのコミュニケーションのため。(9)
- 日常生活でも使用しており、音がないと不安。(4)

練習時に補聴器を**使用しない**選手は 70.2%。



【理由(自由記述の内容)】 ()内の数字は、類似した回答の数

- 競技ルールで使用が禁止されているため。(27)
- 汗や水、衝撃で壊れるため。(21)
- 衝突による危険を防ぐため。(6)
- じゃま、必要ない。(14)
- プレーに集中できる。ない方が落ち着く。(6)

その他は、大会によって**使い分ける**。



【理由(例)】 ()内の数字は、類似した回答の数

- 健聴者の大会では声によってコミュニケーションをとるため使用するが、聴覚障害者の大会ではルールで禁止されているため使用しない。(10)

競技中に補聴器等を使用する理由、使用しない理由は練習の時とほとんど同じである。練習時は使用すると回答したが、試合時は使用しない者は、ルールによって規制されたことによる。この場合、健聴者の大会でルールによる規制がなければ使用することもある。

1-4. デフリンピックで競技中の補聴器等の使用が禁止されていることを知っているか

表 10 デフリンピックの補聴器使用禁止ルールを知っているか

	知っている	知らない	無回答	計
人数(人)	130	14	7	151

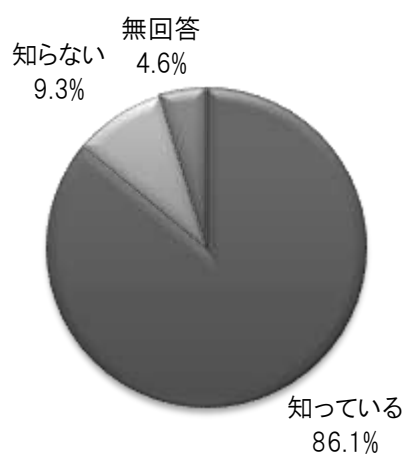


図 12 デフリンピックでの補聴器使用禁止ルールを知っているか

「知らない」と回答した 14 名中、12 名は普段の練習や試合でも使用しない選手であった。

ほとんどの選手は、デフリンピックで補聴器等の使用が禁止されていることを知っていた。しかし、普段の練習中から補聴器を使用しない、あるいはデフリンピックの出場経験のない一部選手の中には、そのルールを知らない選手もいた。

1-5. デフリンピックで、もし補聴器等の使用が許可されるとしたら使用したいか

表 11 デフリンピックで補聴器を使用したいか

	使用したい	使用したくない	その他	無回答	計
人数(人)	37	78	33	3	151

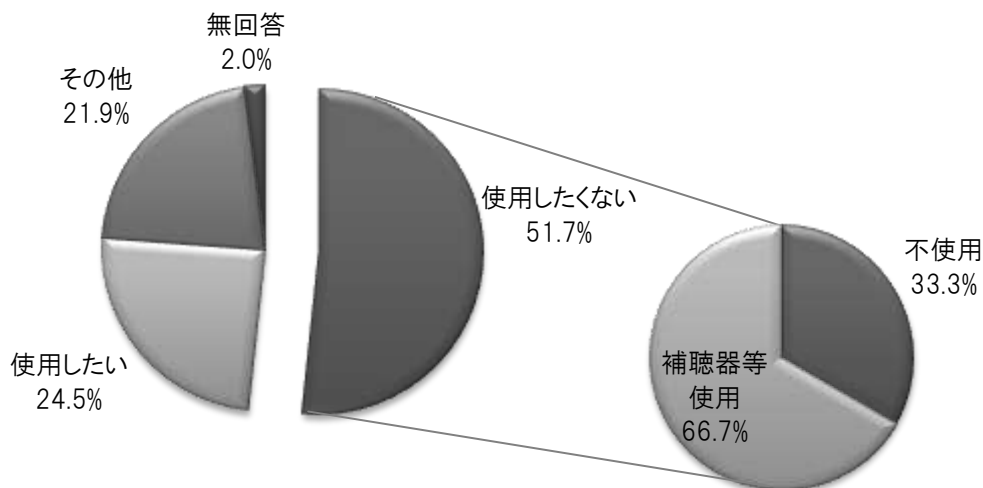


図 13 デフリンピックで補聴器を使用したいか(左)
(右補助図 デフリンピックで補聴器を使用したくない人の、日常での補聴器等の使用状況)

補聴器を**使用したい**選手は 24.5%。



【理由(自由記述の内容)】 ()内の数字は、類似した回答の数

- プレーの向上につながる。(音で判断が速くできる、声のコミュニケーションでミスが減る、リズムがとりやすい、平衡感覚) (11)
- 普段の生活で使用しているから。(6)
- 安心感。(6)
- 音を聞きたい。(5)
- 日本の声援を聞きたい。(4)

補聴器を**使用したくない**選手は 51.7%。



【理由(自由記述の内容)】 ()内の数字は、類似した回答の数

- デフリンピックでは聴こえない条件を揃えることで公平になるから。(16)
- 汗や衝撃で壊れる。衝突の危険性。(16)
- 必要ない、じゃま。(11)
- 聴覚障害者のスポーツをアピールするため。(3)

その他は、どちらでもよい、わからないなど。

デフリンピックで補聴器を使用したくない(51.7%)理由には、これまでの設問と同様、「壊れる」、「必要ない、じゃま」等の理由以外に、聴こえない者同士の大会であるデフリンピックの意義に触れる回答が多かった。一方、使用したい理由として挙げられたのは、「少しでも音による情報があった方がプレーの向上につながる」、「日常生活と同じように使用したい」などである。

2. 日常の練習や試合参加の実態

デフリンピック選手候補の競技生活の実態を明らかにするため、普段の練習形態や、出場する試合の種類および職場を空ける場合の待遇などについて聞いた。

選手のうち、約 60%が会社員および公務員、約 25%が学生である。普段の練習は、週末や夜など、仕事や学校の空き時間を利用する選手が多く、週に 3 日以上活動時間が確保できている選手は全体の約 6 割にとどまる。基本的に、競技ルールは健聴者の種目と同じであるため、健聴者のチームで活動し、健聴者が出場する一般の大会に出場することが可能である。しかしながら、デフリンピックは聴覚障害者のみが参加する大会であるため、特にチームスポーツにおいては、プレーの連携やコミュニケーション、戦術など、健聴者の場合とは異なる。回答者の競技環境から見ると、複数の聴覚障害者が日常的に集まって活動できる時間は制限されていると言わざるをえない。

また、合宿や遠征が仕事と重なった時の扱いは、76.2%が有給休暇を利用しており、日本代表レベルの選手といえども、職場の支援はなかなか受けにくいのが現状である。

2-1. 普段の練習量(シーズン中)

表 12 普段の練習量

	ほぼ毎日	週に3～5日	週に1～2日	その他	計
人数(人)	29	63	54	5	151

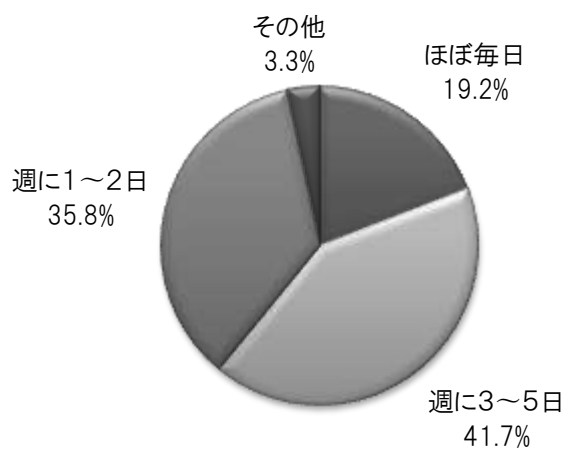


図 14 普段の練習量

週に3日以上活動できている者は全体の60.9%。回答者の大部分は仕事や学業に従事しながら競技活動をしており、競技のための時間は十分に確保できているとはいえない。

2-2. 普段練習するのは週末か、平日か

表 13 練習日

	週末のみ	平日のみ	週末と平日	計
人数(人)	30	5	116	151

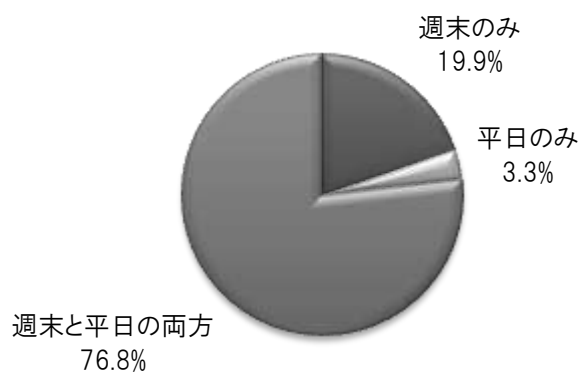


図 15 練習日

2-3. 練習時間帯

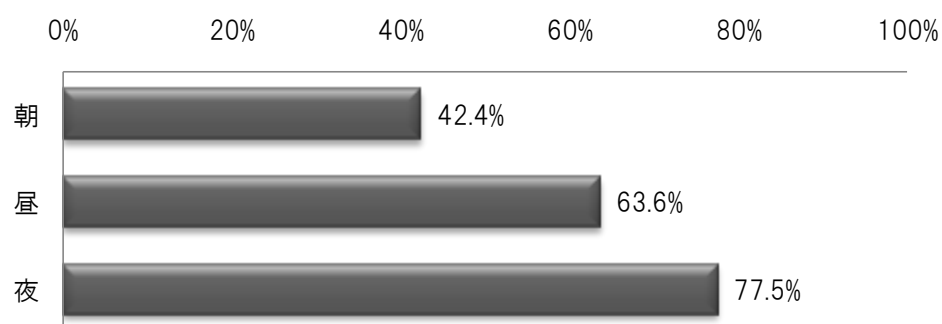


図 16 練習時間帯

仕事や学業に従事しながら競技活動をする者が多いため、全体の 96.7%が週末を練習に充て、仕事や学校が終わった後、夜間に練習することも多い。

2-4. 練習場所

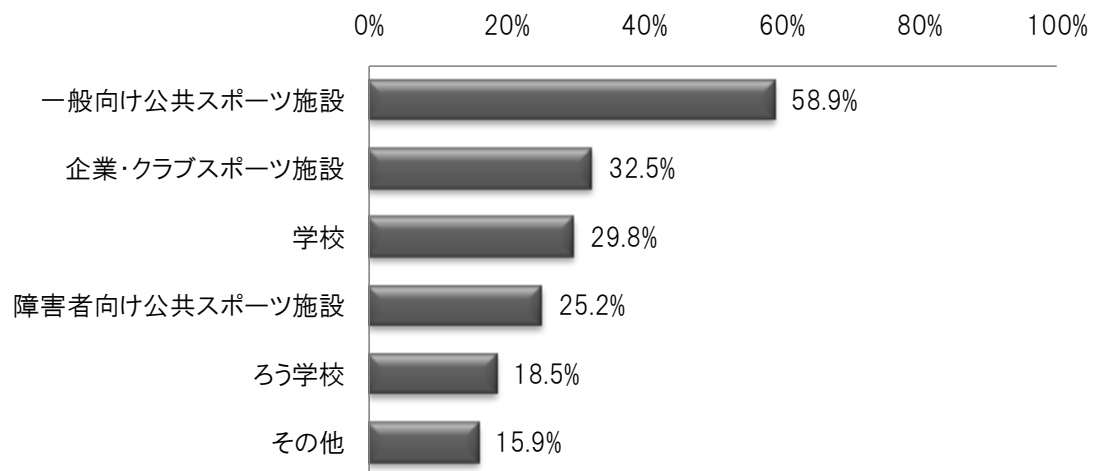


図 17 練習場所

「その他」には、道路、公園、河川敷、海岸などが挙げられた。

2-5. 活動形態

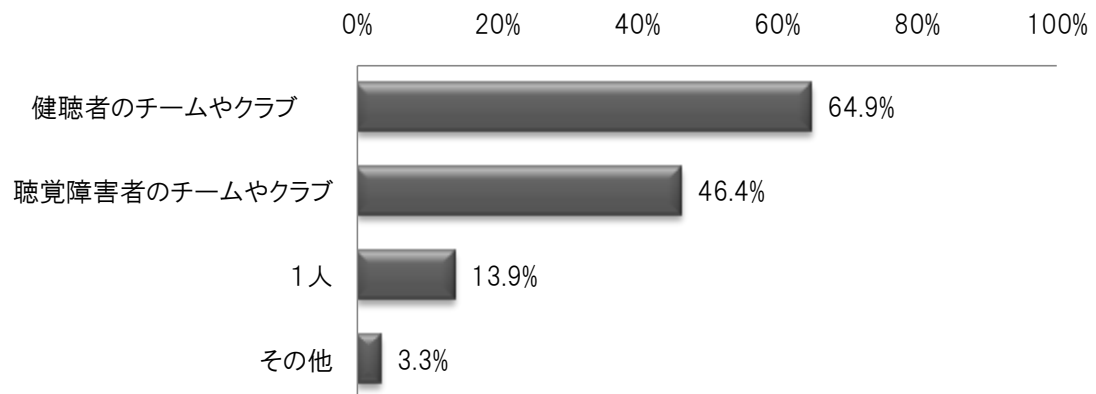


図 18 活動形態

27 人(17.9%)は、健聴者のチームと聴覚障害者のチーム両方と回答。

聴覚障害者のスポーツは、競技のルールや設備は特別なものではないため、普段は健聴者のチームやクラブで活動し(64.9%)、一般の公共スポーツ施設を利用するケースが多い(58.9%)。同じ競技活動をする複数の聴覚障害者が、日常的に集まって活動できるのは限られる。

2-6. 出場した大会

この設問では、過去 1 年間に出場した大会の種類と回数を尋ねたが、「数えきれない」「多数」など、過去に出場した大会についての回答が多かったため、各種大会について 1 回以上出場したと記入された人数を集計した。

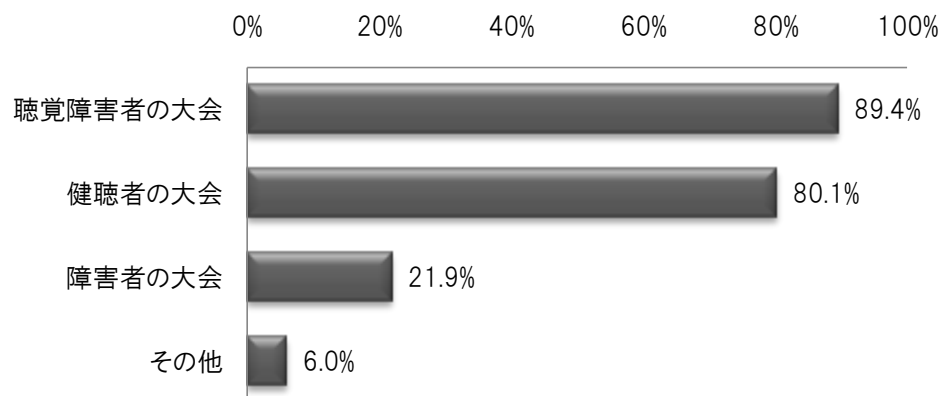


図 19 出場した大会

聴覚障害者は、聴覚障害者の大会だけでなく、障害者の大会や、健聴者の出場する一般の大会にも出場資格を持つ。80.1%の選手が、健聴者の大会に出場している。

2-7. 勤務と合宿・遠征が重なった時の扱い(公務員、団体職員、会社員のみ回答)

回答者 101 人

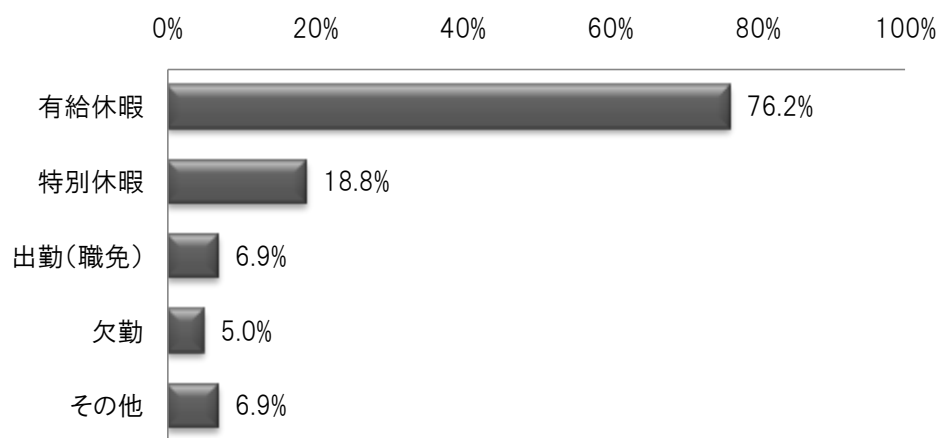


図 20 勤務先での出欠の扱い

有給休暇を利用して合宿や遠征に出かけている選手が最も多い(76.2%)。特別休暇や職免などの待遇が受けられる可能性は 3 割程度。日本代表選手として大会に出場する場合は、相談により考慮される場合もある。

3. 練習や試合にかかる費用

選手たちが競技活動をする上で、どんなものに、どの程度の費用がかかっているのかを聞いた。

回答者のうち、1人がプロ選手であると回答した以外は全員アマチュアの選手であり、練習や試合にかかる費用は、手話通訳費から遠征費まで、あらゆる費用を選手自身が負担している。負担する費用の中で最も金額が大きいのは、遠征費および合宿費である。

一方、一年間の自己負担金額は 50 万円未満であるという回答が多かった。これは、健聴者のトップアスリートや他の障害者アスリートと比べると少ない方である。この理由としては、聴覚障害者スポーツはまだ競技性が低く、海外遠征や世界大会への出場が少ないことや、競技のための特殊な用具を必要としないことが考えられる。

3-1. 競技スポーツにかかる費用のうち、自己負担しているもの

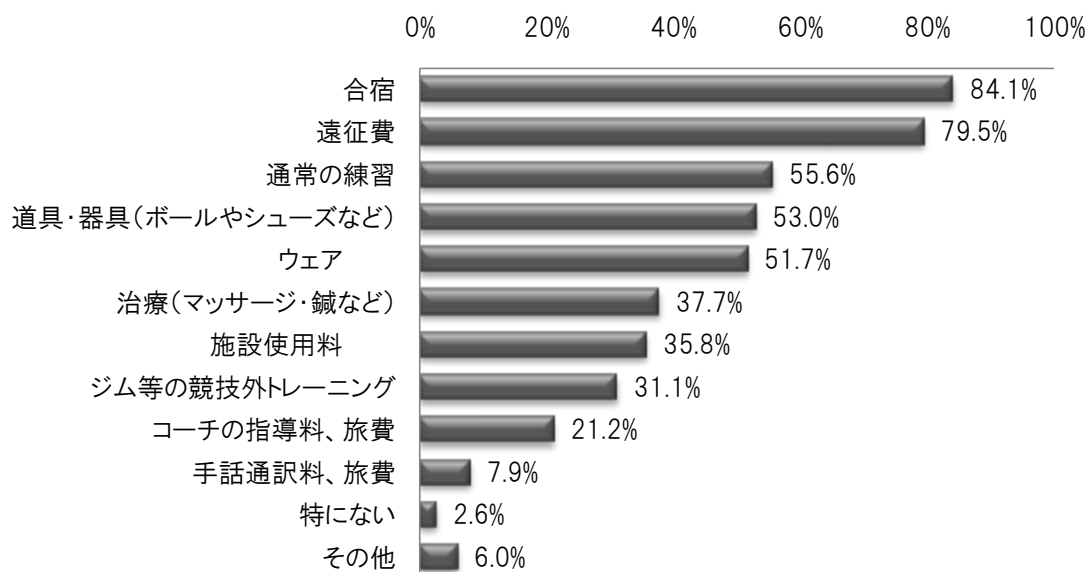


図 21 自己負担する費用

3-2. 競技スポーツにかかる費用のうち、自己負担金額が多いもの

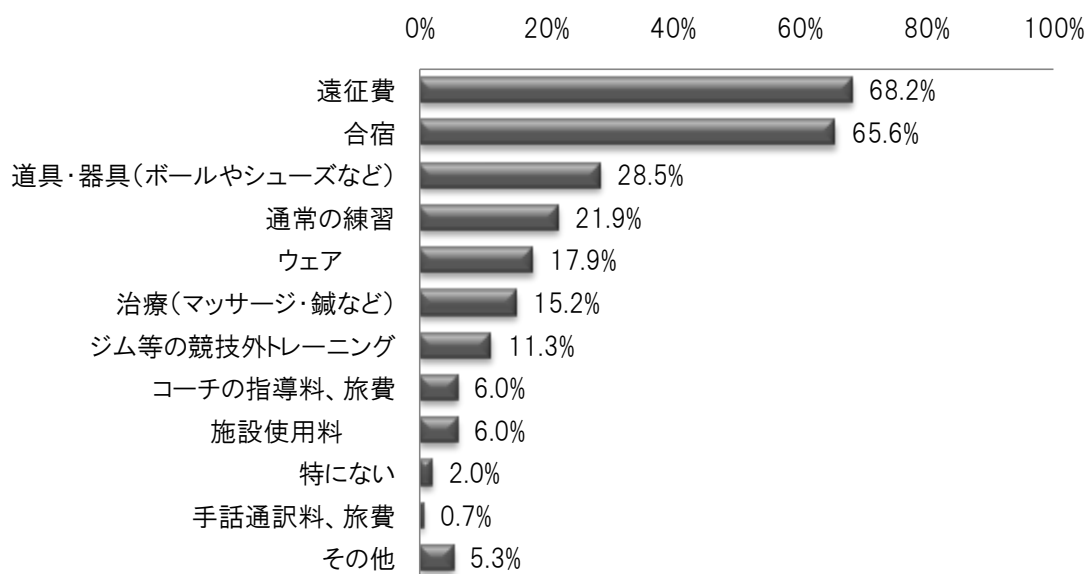


図 22 自己負担する費用のうち、金額が多いもの

合宿費、遠征費から手話通訳まで様々な費用を選手自身が負担しているが、その中でも、遠征と合宿にかかる費用が特に大きい。

3-3. 一年間の自己負担金額

表 14 一年間の自己負担金額

金額(円)	～50万	50万～100万	100万～150万	150万～200万	200万～	わからない	無回答	計
人数(人)	85	48	6	1	0	8	3	151

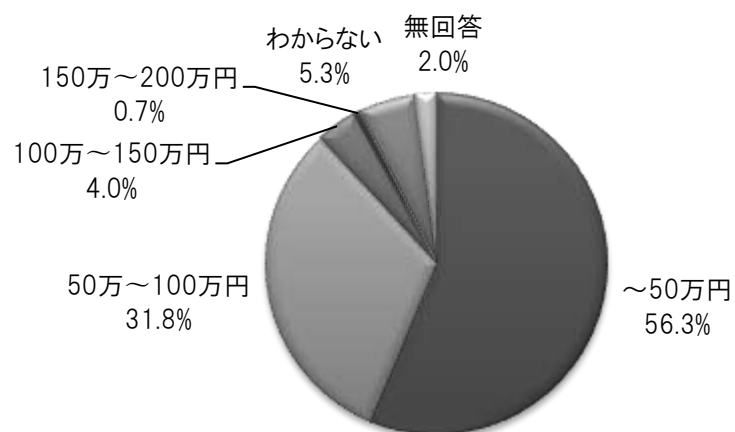


図 23 一年間の自己負担金額

一年間の自己負担金額は、50 万円未満が最も多く(56.3%)、他のスポーツ選手と比べるとやや少なめである。

4. コーチ、トレーナー等

スポーツ選手の競技活動において、コーチの指導やトレーナー等のサポートは必要不可欠である。ここでは、聴覚障害者のアスリートが受けている指導体制の現状と、選手の要望などを聞いた。

回答者の中で、日常的に指導やサポートを受ける専任のコーチ、トレーナーがいるのは、全体の6割に満たない。さらに、そのコーチやトレーナーの半数はボランティアで活動しており、日本代表レベルの選手としては非常に厳しい状況であるといえる。

指導を受けているスタッフについて見てみると、約8割が所属チームの監督やコーチである。指導スタッフに占める聴覚障害者の割合は約2割と少ない。聴覚障害者のスポーツ選手は、普段は健聴者のチームやクラブで活動する選手も多いが、ここで健聴の指導者とのコミュニケーションに困難を感じる状況もしばしばあるようである。例えば、「監督からのアドバイスが聞き取れない」、「手話通訳を介すると、伝わらない部分がある(ズレが生じる)」などが述べられた。このようなコミュニケーションの問題は、技術や専門知識の獲得を妨げるとして、不安を感じる選手もいた。

では、選手たちが求める指導者は、コミュニケーションに困難のない聴覚障害者の指導者なのだろうか。必要な専任コーチ・トレーナーはどんな人か、という質問に対する回答は、健聴者、あるいは手話のできる健聴者が58.3%、どちらでもよいが46.2%、聴覚障害者は9.1%にとどまった。聴覚障害者のアスリートにとって、活動中のコミュニケーションがスムーズであることは重要であるが、現在、最優先に求められていることは、高い技術や専門知識を持つ指導者に指導を受けられる環境であるといえる。

4-1. 普段、指導やサポートを受けている専任のコーチ・トレーナーはいるか

表 15 専任コーチ・トレーナーの有無

	いる	いない	計
人数(人)	86	65	151



図 24 専任コーチ・トレーナーの有無

4-1-1. 専任コーチ・トレーナーはどんな人か

表 16 専任コーチ・トレーナーの所属

	人数(聴障／健聴)(人)
所属チームの監督・コーチ	68(15／53)
クラブ指導者	25(4／21)
障害者スポーツ競技団体のコーチ	10(3／7)
学校の先生	10(1／9)
ろう学校の先生	7(3／4)
障害者スポーツ指導員	3(1／2)
日本体育協会指導員	3(0／3)
その他	7

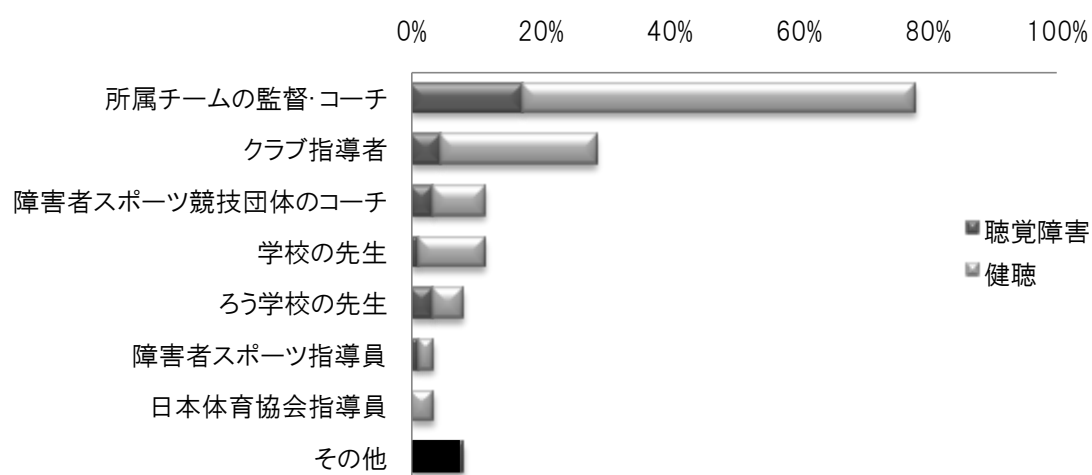


図 25 専任コーチ・トレーナーの所属

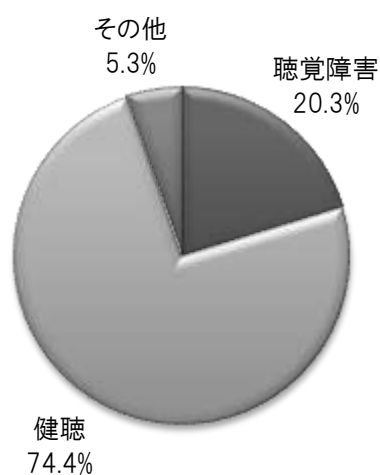


図 26 専任コーチ・トレーナーの聴覚障害者と健聴者の割合

4-1-2. 専任コーチ・トレーナーは、ボランティアか、有料か

表 17 専任コーチ・トレーナーの指導料の有無

	ボランティア	有料	無回答	計
人数(人)	47	31	13	87

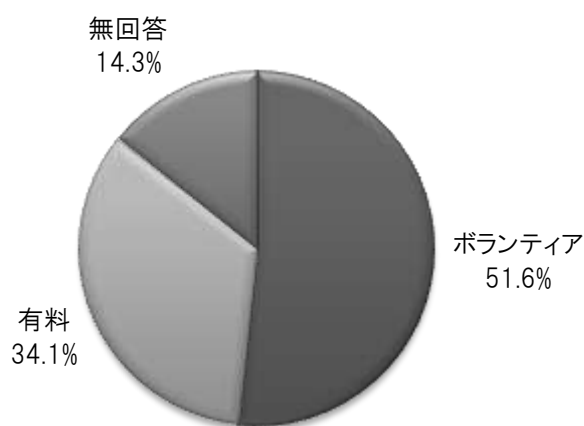


図 27 専任コーチ・トレーナーの指導料の有無

専任のコーチ・トレーナーがいる人が、いない人を上回ったものの、日常的に指導やサポートを受けられる環境にある選手は 6 割程度しかいない。さらに、その半数はボランティアであり、選手および指導者の競技環境は十分に整っているとはいえない。

また、指導者の 74.4%は健聴者である。これは、多くの選手が健聴者のチームやクラブで活動していることと関連する。

4-2. デフリンピック代表チーム監督やスタッフ以外に普段指導を受けている専任コーチ・トレーナーを同行させたいか

表 18 デフリンピックに専任コーチ・トレーナーを同行させたいか

	同行させたい	同行させなくともよい	わからない	無回答	計
人数(人)	79	34	34	4	151

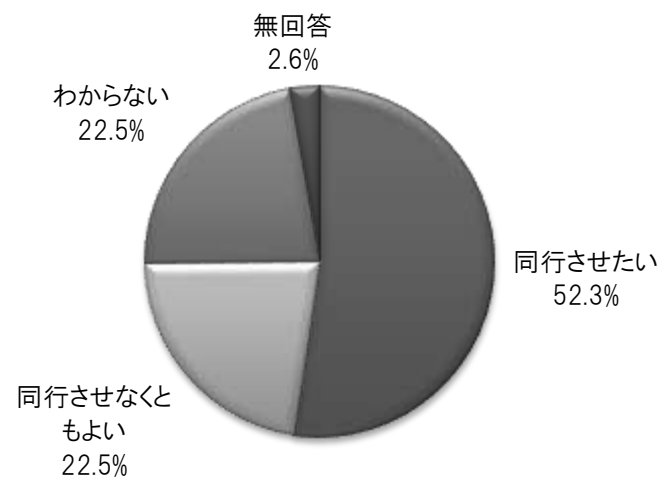


図 28 デフリンピックに専任コーチ・トレーナーを同行させたいか

4-3. 競技スポーツをやるにあたり、専任コーチ・トレーナーは必要か

表 19 競技スポーツに専任コーチ・トレーナーは必要か

	必要	必要ない	わからない	無回答	計
人数(人)	129	8	13	1	151

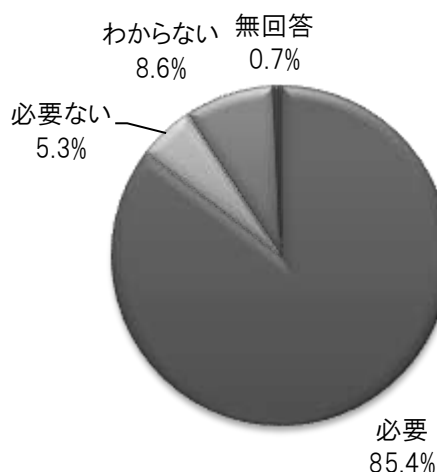


図 29 競技スポーツに専任コーチ・トレーナーは必要か

4-3-1. 必要な専任コーチ・トレーナーはどんな人か

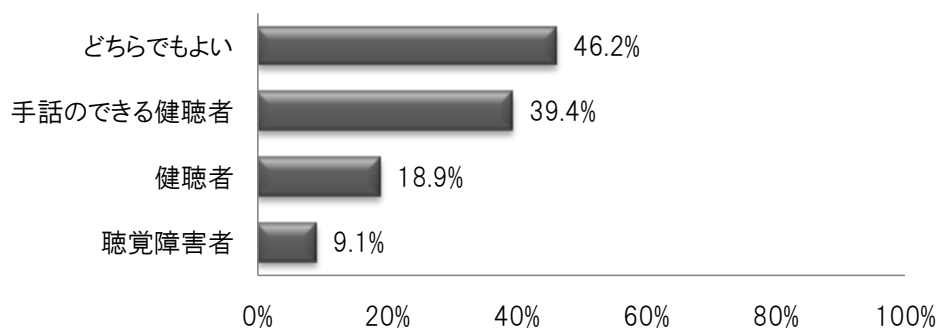


図 30 望ましい専任コーチ・トレーナー

「健聴者なら通訳がいた方が望ましい」、「高い競技レベルを持った人のほうがいい」、「手話が出来ればどちらでもよい」というような条件付きの回答もあった。

専任のコーチ・トレーナーがいる人は、現状では 57.0%であるが、それを大きく上回る 85.4%の人が、専任コーチが必要であると回答した。

求められる指導者について、健聴者か、聴覚障害者かで見ると、健聴者が約 6 割、聴覚障害者が約 1 割である。ただし、健聴者の場合は、手話のできた方がより良いという条件付きである。競技の指導において、指導者が聴覚障害者か健聴者かは問題ではない(どちらでもよい)という回答も半数近くいる。

4-4. スポーツ競技の指導やサポート(技術、医学、栄養等)を受ける上で、聴覚障害と関連して特に困難に感じていること

51人(33.7%)から、「困難に感じていること」についての記述があった。キーワードの出現頻度は、「コミュニケーション」(18人)が最も多く、次が「指導、指示、アドバイス」(16人)、「健聴(健常)者」(9人)、「わからない」(8人)、「手話」(8人)、「情報」(6人)、「知識」(6人)、「専門」(6人)、「技術」(5人)と続く。

選手が困難に感じていることを、

- 健聴者とのコミュニケーションの問題
- 聴覚障害と情報、情報保障の問題
- 聴覚障害者同士のコミュニケーションの問題
- 専門家の不足や競技環境の問題

の4点に分類し、記入されたすべての事例を以下に示した。なお、文章は回答者の原文そのままの形で記載した。

■【健聴者とのコミュニケーションの問題】

・デフのチームなら皆ほぼ平等に知識を得たり技術を得られるが、健聴者のチームでプレイする時は、チーム全体での雰囲気や会話が、(コーチの指示等も)読み取れない所が多い。何?と聞けば教えてくれるが、聞かなければわからないままなので、わからないこともわからないままというのも多いと思う。その面では情報の差というのは大きいと思う。

・おはなしがわからない。

・コーチ(健聴者)からの指導を受ける時、口話になっているので、わかる、わからない まちまち。治療の関係(テニスによるケガ)などで医師からわからない事がある。

・Mtgを実施すると、健聴者は普通のスピードで会話のやりとりをしていて、話の内容についていけないときがある。受けるからには、1~10まですべて知りたい。

・健常者は、聴覚障害のことを理解しているか。

・コミュニケーション。考えている事が伝わったかどうか。

・コミュニケーションの問題。

・コミュニケーション(健聴者に対して)。手話通訳を介すると、伝わらない部分がある(ズレが生じる)。

・遠征や合宿の時、監督からのアドバイスなどが聞き取れない。こうふうにやるのか、ここを直したほうがよいとか、わからなくて自分が上達しない所があった。

・コミュニケーションがとりにくい。

・高校、大学の際は一般の学校に通っていました。1対1でコミュニケーションを取るときは筆談などして下りましたが、生徒全員に対してせつめいなどされるときは普通に話していたのでまったく理解できませんでした。

・手話のできる健聴者がいいと言っても「聴覚障害者」と言う意味深く知る人の方がいいです。手

話のできる健聴者はいくら誰にでもありますので、「聴覚障害者」に対してよく知る人と、気持ちが通じる健聴者が一番いいと思います。

- ・専門知識を持っている方が手話を使えないこと。筆談に対応できる選手もいるが、手話でないと十分な意思疎通ができない選手もいる。
- ・個別指導の時は問題ないが、集団での指導の時、何を言っているのか分からない時がある。
- ・監督のアドバイスがはやくて何言っているか分からない時がある。指導する時の話(ミーティング)などの時、聞きとれない。
- ・指導を受ける時、コミュニケーションがうまく伝わらない。通訳者がいたとしてもそのスポーツの専門の知識をもちあわせていなくてズレが生じる。
- ・基本的に健常者と練習を行っているのですが、やはり技術の面で成長の遅れを感じる。例えば、技術の説明があっても会話方法が口話であるため、100%の情報を得る事ができない。
- ・コミュニケーション。手話が出来ても意思疎通のズレもある。手話のできるレベルにより変わる。
- ・コーチとうまくコミュニケーションできない。
- ・1番はコミュニケーションの難しさだと思う。練習は何人かと一緒にやるのでその人達とのコミュニケーションも大切。
- ・相手の顔を見て、大きな声を出して分かりやすいです。口を見て、何言ってるか分かるようにしています。
- ・コミュニケーションがしっかりとれていない。スタッフの言いたいことが 100%通じていないときがある。
- ・コミュニケーションで多少の問題はあるかもしれない。(手話が出来ない人)
- ・コミュニケーション。
- ・コミュニケーションをとることの困難(健聴者のコーチと)。
- ・コミュニケーションです。

■【聴覚障害と情報、情報保障の問題】

- ・説明がなく初めて聞く専門用語が多い講演で理解してないまま終わってしまう。
- ・情報保障が一番大切だと思う。聴覚障害は聴者と違って1つ1つ確認が必要である。また、時間を要するので余裕を持って早い段階での指導やサポートが必要になってくると思う。
- ・コミュニケーション。競技の専門用語は、わからないことが多い。
- ・ある程度の情報があまり入ってこない。(ex. クチコミなど)
- ・障害者だけのスタッフだと、練習も合宿も試合もコミュニケーションの面または情報が入ってこないことで不便が生じる。

・いろんなスポーツをやってきて、今、柔道に専念しているが、道場、学校などの練習に交って行っているが、特別コーチ、技術、医学、栄養等で指導を受けた事や自分なりのメニュー作成で現在に至る。ただ、聞こえない分、囲い方その理解でやってこれたと思う。

■【聴覚障害者同士のコミュニケーションの問題】

・手話でのコミュニケーションに時間がかかる。元々バスケット用語の手話表現がないためすべて指文字でやっているため。

・手話は全国共通ではない(地域の手話とか)ので、たまに読みとれない手話が多い。他はとくになし。

・コーチも同様ですが、耳が聞こえないため、容易に集合をかけられない。時間がかかる。

・試合中のアドバイスが聞こえない。ほとんどがアイコンタクト(自分で考えるしかない)。音が聞こえない為、避ける反応が微妙に遅れてしまう(突きを出す音、蹴りを出す音)。

■【専門家の不足や競技環境の問題】

・コーチやトレーナー等アドバイスができる人をもっと増えてほしいと思っています。

・もう慣れたから今のままでいいけど、企業のデフリンピックに対する見方をもう少し優遇して欲しい。

・柔道整復師、テーピングの資格を持つトレーナーが必要！！今回私の友人がトレーナーとして雇ってもらえるが、友人は全額負担になる！それを踏まえてサポートしてほしい。バスケットボール関係のスタッフは運営などいろいろ大変になるが、もっと人数を増やして充実してもらいたい。

・もっと情報公開して欲しい。ドーピングに関する情報等。

・ケガ防止のため講習。

・栄養に関しては知識が低いようなので重要さを知って欲しいと思いました。

・自身、デフリンピック出場、今度で4回目なのですが、競技日程が過酷である為、筋肉の疲労はつきもの。毎回、自分の体は自分でケアしてきたが、又はケアする時間を選手同士で交互にやっていたが、やっぱりスポーツトレーナーは必要だと思います。筋肉をほぐして、又は、食事改善等、指導してもらったりすると安心感が得られると思います。

・マッサージの人がいない。出来れば必要だと思います。

・ドーピング対策や栄養について学ぶ機会が少なすぎる。また、合宿も少ない為、思う存分サポートを受けることが出来ない。

・技術や体力面での指導は合宿等でアドバイスしてもらえるが、メンタル面や栄養などの面のサポートは専門性のある人からのアドバイスがないと強化しにくい。世界に勝つためにはメンタル面の強化が必要だと考えられる。

・医学的なトレーナー、技術的なカントク(指導資格のある人)が不十分になっている。

- コミュニケーション(手話がわからない分からない人が多い等)。知識不足(専門単語)が分からない人が多い。
- 今までずっと独自で練習してきました。指導やサポートと言えば、合宿やデフリンピックしかないので、普段練習ではありません。
- 今のところ、特にない。しかし、デフリンピックを目指すとなると、必ずドーピングとは付き合わなければならないが、知識がなく、相談できる相手がいないことが多い。

5. 競技スポーツへの参加と意識

デフリンピックを目指す選手たちが、何をきっかけに競技を始め、何を目的とし、何を励みに活動しているかを聞いた。さらに、競技活動の中で苦労していることについても聞いた。

現在のスポーツを始めたきっかけとして最も多い理由は、「やりたかったから」という本人の意思である。勧めや誘いを受けたのは、家族、聴覚障害の友人、健聴の友人で、必ずしも聴覚障害者のスポーツとして現在のスポーツを始めたわけではない。一方、初めから「デフリンピックに出場すること」を目標として競技を始めた人も16.6%いた。

選手が競技スポーツに参加する主な目的は、「競技力向上」、「デフリンピック金メダル」というように、競技で良い成績をあげることである。それに付随して、自身の「人間的成長」、「健康の維持増進」が期待される。また、聴覚障害者にとって、スポーツを通して仲間と交流し、励ましあうことは、「生きがい」であり、「聴覚障害の仲間とのコミュニケーション」の場となっている。世界で活躍するトップアスリートは、子どもたちの憧れである。聴覚障害者トップアスリートが、見る人に「夢を与える」という思いは、同じ聴覚障害者に向けてだけでなく、障害に関わらず、すべての人へのメッセージである。彼らが競技を続ける上で最も励みになることは、「家族の応援」、「競技仲間との励ましあい」、「在学や勤務先からの応援」など、特に身近な人からの応援が中心になっている。周りの人から理解され、応援されることは、自分の自信にもなり、競技へのモチベーションも高める。逆に、周囲の人々の理解と支援がないと、競技を続けることは困難であるといえる。

競技スポーツを行ってきて苦労したことは、「費用がかかること」が圧倒的に多かった。また、仕事や学業をしながら競技生活をする選手たちにとって、「学業や仕事に支障が出る」、「大会、合宿の時など休みが取りにくい」などの苦労が常につきまとう。一方、聴覚障害による苦労と言えるのは、「競技仲間(健聴)とのコミュニケーション」や、「情報が得にくい」、近くに「競技仲間(聴覚障害)」がいないことなどがあげられる。デフリンピックがもっと理解され、より競技に専念しやすい環境が整っていくことが今後期待される。

5-1. 現在のスポーツ競技を始めたきっかけ

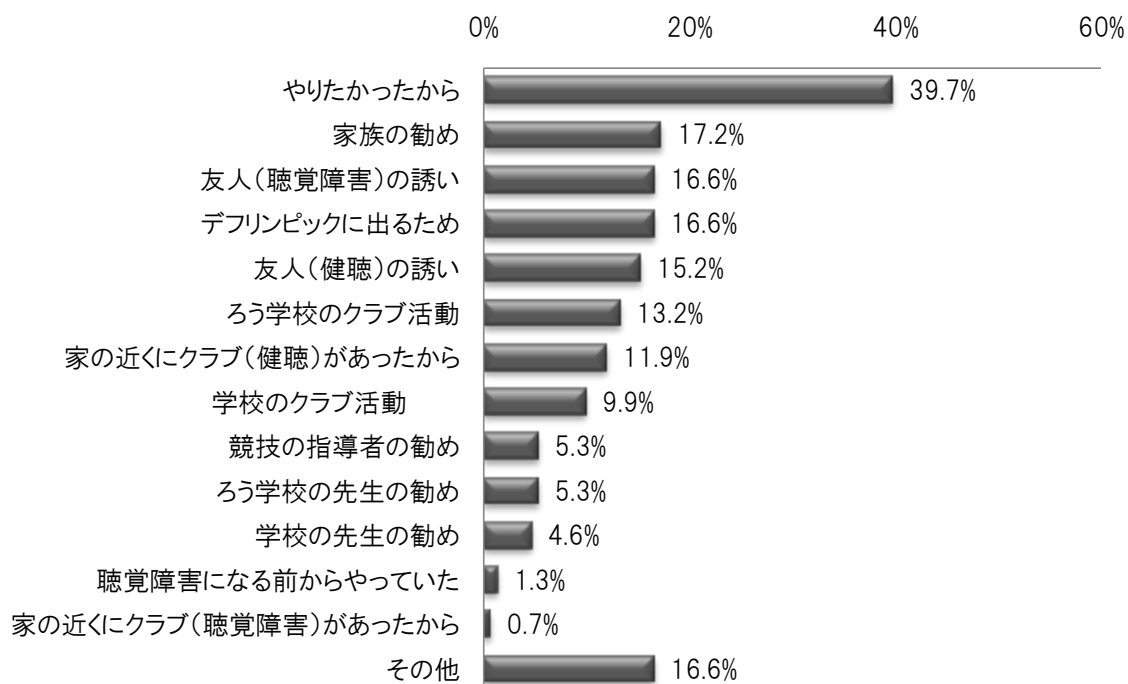


図 31 現在の競技スポーツを始めたきっかけ

「その他」には、親、兄弟、先輩の影響、マンガの影響、有名選手への憧れ、協会からの募集と勧誘などがあつた。

現在のスポーツを始めたきっかけとして最も多いのは、やりたかったから(39.7%)という本人の意思。勧めや誘いを受けたのは、家族(17.2%)、聴覚障害の友人(16.6%)、健聴の友人(15.2%)。好きで始めたスポーツが現在の競技活動に継続していることが多い。初めからデフリンピックに出場することを目標として競技を始めた人も16.6%いた。

5-2. 競技スポーツに参加する主な目的

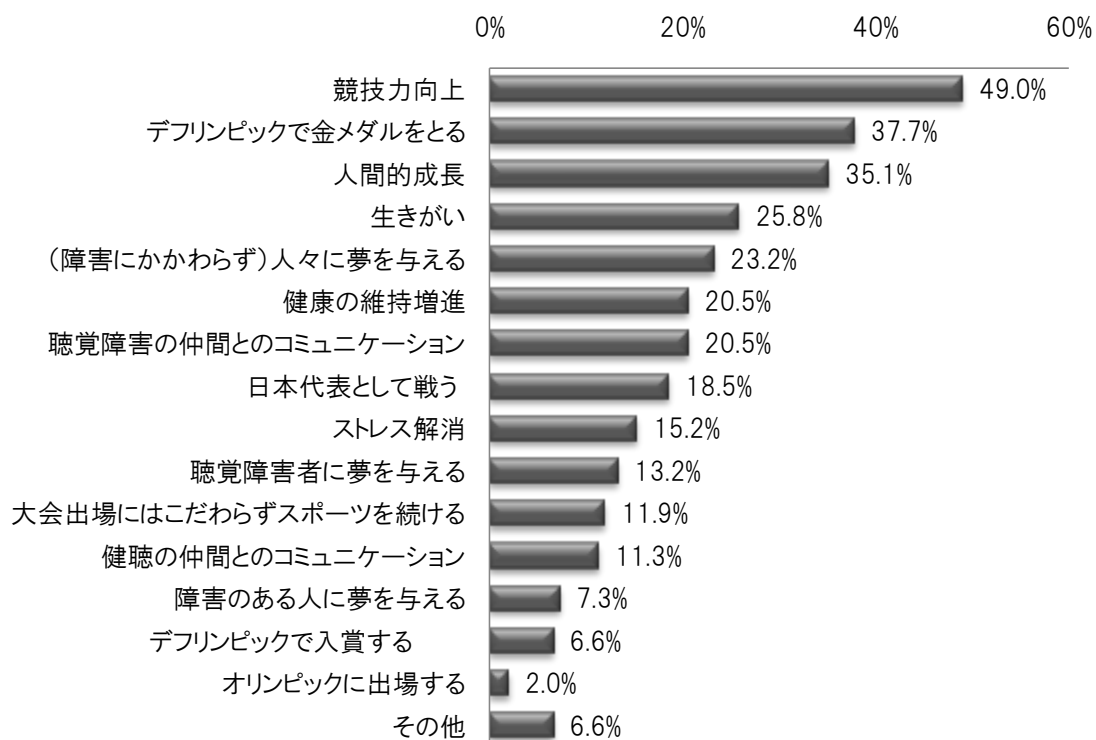


図 32 競技スポーツに参加する目的

選手が競技スポーツに参加する主な目的は、競技力向上(49.0%)、デフリンピック金メダル(37.7%)と、競技で良い成績をあげることである。それに付随して、自身の人間的成長(35.1%)、生きがい(25.8%)、健康の維持増進(20.5%)、聴覚障害の仲間とのコミュニケーション(20.5%)が期待される。見る人に夢を与えたいという思いは、聴覚障害者に向けてだけでなく、障害に関わらず、すべての人へのメッセージである。

5-3. 競技スポーツを行ってきて苦勞したこと

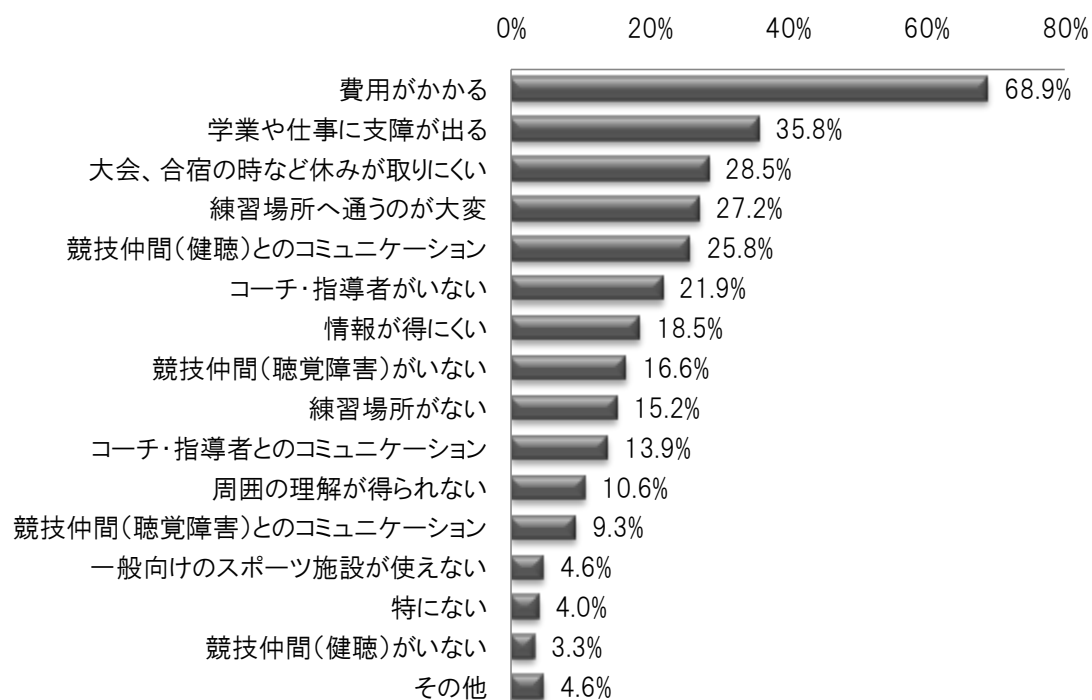


図 33 競技スポーツで苦勞したこと

競技スポーツを行ってきて苦勞したことは、費用がかかる(68.9%)が圧倒的に多い。また、仕事や学業をしながら競技生活をする選手たちにとって、学業や仕事に支障が出る(35.8%)、大会、合宿の時など休みが取りにくい(28.5%)などの苦勞が続きまとう。

聴覚障害による苦勞と言えるのは、競技仲間(健聴)とのコミュニケーション(25.8%)や、情報が得にくい(18.5%)、近くに競技仲間(聴覚障害)がいない(16.6%)ことなどがあげられる。

5-4. デフリンピック選手候補として特に励みになること

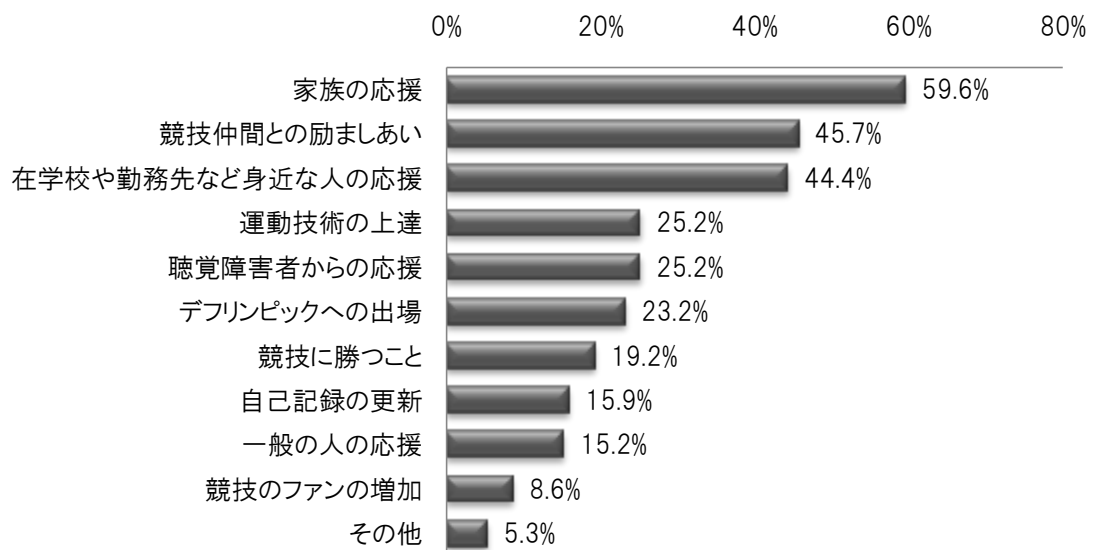


図 34 デフリンピック選手候補として励みになること

競技スポーツをする選手にとって最も励みになることは周囲からの応援であるが、デフリンピック選手においては、家族の応援(59.6%)、競技仲間との励ましあい(45.7%)、在学や勤務先など身近な人の応援(44.4%)など特に身近な人からの応援が中心になっている。

6. デフリンピックについて

デフリンピックは、国内での認知も低く、今後の発展のために多くの課題を抱えている。選手たちは、デフリンピックについてどのように感じているのか、オリンピックやパラリンピックとの違いを感じる点、またデフリンピックにどのような要望や夢を持っているのか聞いた。

オリンピックやパラリンピックとの違いを感じる点は、「マスコミの扱い」と「一般の人の関心」が大きい。同じように日本代表として戦うことに対する人々の注目や評価の違いを選手たちは実感している。特にパラリンピックとは、同じ障害者スポーツであるにもかかわらず、「国や行政からの評価」が違っていると回答している。

デフリンピックや聴覚障害者スポーツの今後については、多くの要望や思いが述べられた。内容としては、「まずみんなに知ってもらうこと」を望む声が多かった。デフリンピックや聴覚障害について理解してもらうことは、選手たちのモチベーションだけでなく、将来的な競技環境の整備、そして、競技レベルの向上につながると考えられる。さらに、次の世代の子どもたちに夢を与えたい、スポーツを通してろう者の文化を理解してもらいたい、聴覚障害者の仲間をもっと増やし、競技を普及させたい、などの他、現在の競技に対する支援体制や組織体制をもっと整えて、より競技に専念できる環境を作ってほしいという切実な願いが述べられた。

6-1. デフリンピックとオリンピックでは何が違うと思うか

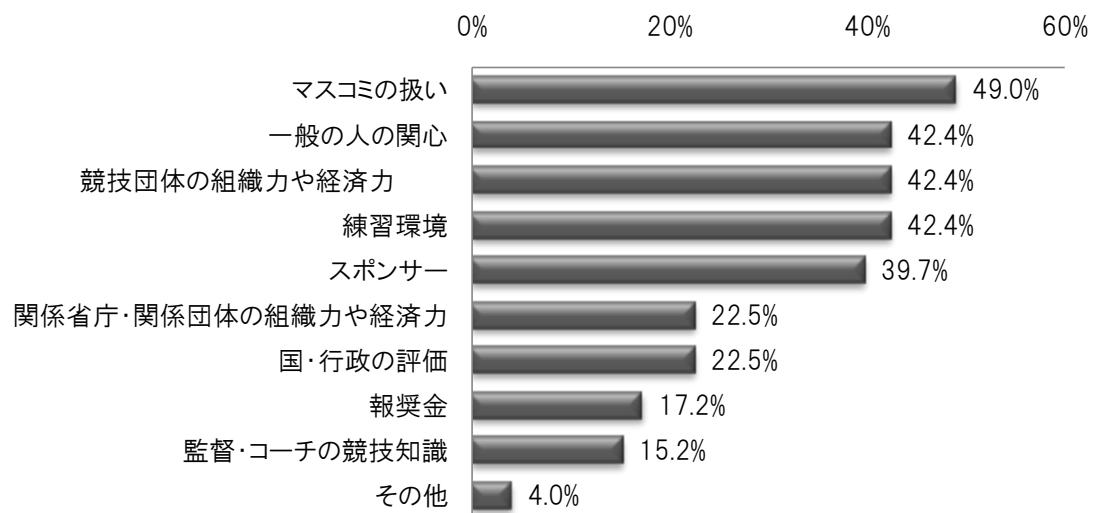


図 35 デフリンピックとオリンピックの違い

6-2. デフリンピックとパラリンピックでは何が違うと思うか。

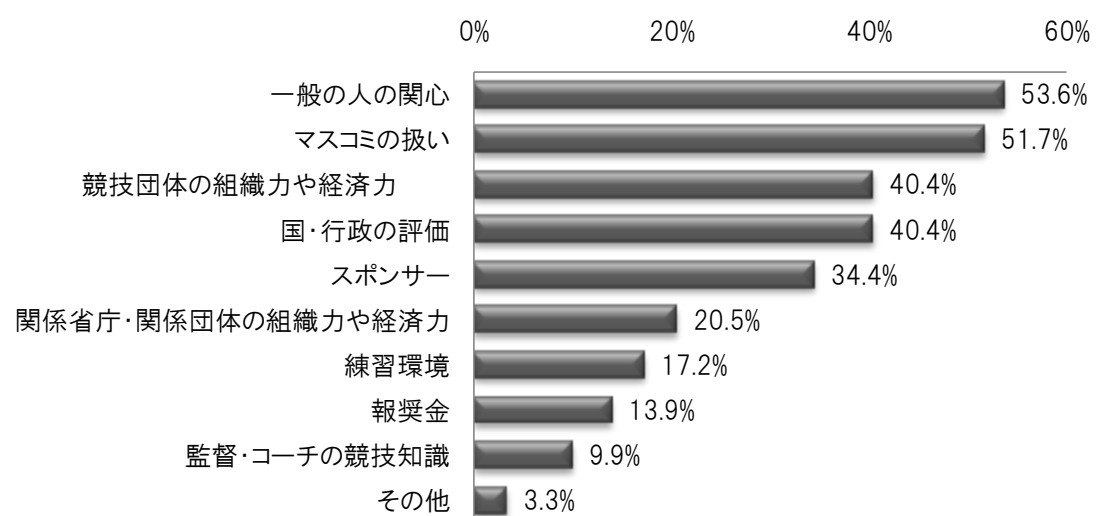


図 36 デフリンピックとパラリンピックの違い

デフリンピック選手としては、オリンピックやパラリンピックと同様に、マスコミに取り上げられ、一般の人に関心を持ってもらいたいという気持ちが強い。また特に、同じ障害者スポーツとして、パラリンピックとの国や行政の評価の違いを感じている。

6-3. デフリンピックや聴覚障害者スポーツの今後についての要望や夢

「デフリンピックや聴覚障害者スポーツの今後についての要望や夢」について、自由記述式で回答を求めたところ、81 人(53.6%)の記述があった。その結果、まずみんなにデフリンピックを知ってもらいたい、という内容が多くを占めた。知ってもらい、理解してもらうことが、将来的な競技環境の整備、そして、競技レベルの向上につながる。さらに、次の世代の子供たちに夢を与えたい、スポーツを通してろう者の文化を理解してもらいたい、聴覚障害者の仲間をもっと増やし、競技を普及させたい、などの他、現在の競技に対する支援体制や組織体制をもっと整えて、より競技に専念できる環境を作ってほしいという切実な願いが述べられた。

キーワードをまとめると以下ようになる。

「知って、知名度、認知、周知」 (31 人)

「パラリンピック」 (18 人)

「一般の人、世間、国民」 (17 人)

「オリンピック」 (15 人)

「マスコミ、テレビ」 (12 人)

「スポンサー」 (10 人)

「アピール、PR」 (9 人)

「環境」 (9 人)

「費用、資金、金銭、負担など」 (9 人)

「子ども」 (9 人)

「監督、コーチ、トレーナー」 (8 人)

「支援、サポート」 (6 人)

「理解」 (6 人)

以下に、実際の記述内容をすべて示した。なお、文章は回答者の原文そのままの形で記載した。

■【まずは知ってもらうこと】

- ・デフリンピックはパラリンピックより先にはじめたのに一般人の意識があさい。聴覚障害者(特に日本)はレベルが低いので上げさせるための環境が少ない。
- ・一刻でも早く、デフリンピックを国内で周知し、派遣要請の手続きを楽にしたい。
- ・デフリンピックの事で知名度を高めて欲しいと思います。
- ・デフリンピックの認知度はオリンピックやパラリンピックに比べて低いです。低いからこそ、どうやって認知度を高めていくか、小さなことでいいから行動を起こそうよ！聴覚障がい害者にとってデフリンピックはとても大きな大会(世界大会)なので、日本代表としての誇りを持って一般向けにも認知できるよう努力していきたい。
- ・もっと一般の人達に広めて欲しい。
- ・もっと世間にデフリンピックの存在を知ってほしい。その上で、選手がよりスポーツに励める環境

や、支援を得られるようになってくれたら嬉しいです。

- ・デフリンピックもパラリンピック同様に一般の人の知名度を上げたい。

- ・もっと世間に広めて、知名度を上げて欲しい。日本での知名度3%は低すぎる。

- ・パラリンピック、スペシャルオリンピックスほど、デフリンピックは、まだまだ知られていない。もっとメディアに対して、デフリンピックの存在を伝えてほしい。認知、周知が広がることは、アスリートの自覚を高めることにつながると思う。

- ・スポンサー増加。マスコミの扱い。一般人の関心。

- ・パラリンピックと同等の知名度を持たせたい。

- ・デフリンピックを知らない人が多い。なのでたくさんの人にデフリンピックとは何か？を知ってもらえるようアピールが必要だと思う。デフリンピックもパラリンピックもオリンピックと同等な目で見てもらえるようになってほしいと思います。

- ・TV や雑誌に広告としてPRしたい。 ニュース(スポーツなど)に出てほしい。オリンピック or パラリンピックのように、沢山PR できたらいいなと思っています。

- ・オリンピックのように報奨金がたくさんもらえるようにしてほしい。デフリンピックをもっとたくさんの人に知って欲しい。例えば、テレビとかで放送してほしい。オリンピックよりも感動を与えられるから・・・。

- ・夢があります。デフリンピックの知名度がちょっと足りないですが、今回のデフリンピックでかつやくできるようにアピールしたいと思います。オリンピックやパラリンピックと同じぐらいに知ってもらうように教えてあげたいこと。

- ・一般人の関心を広める為には、マスコミを利用したい。最近、世界的な不況で、失業者が増加しており、その中にデフリンピックを目指す友人がいます。どういうふうに、資金的えんじょしたい。

- ・健聴者のスポーツと同じように、聴覚障害者のスポーツにもスポットライトを浴びる機会が増えてもいいのではないかと思います。そのためには、今以上に組織力を高め、世間へ訴えていきつつ、自分自身も周囲に認めてもらえるだけの技術力の向上、人間性を高めていかなければならないと考えている。

- ・「デフリンピック」という認知度がすごく低いので、もっと認知度を上げてほしい。

- ・デフリンピックはパラリンピックと比べて認知度が低いので、もっとデフリンピックの認知度を高めて欲しいです。

- ・デフリンピックを知る国民が少ない。出来れば、国民の人々に知ってほしいです。あとはやっぱり、スポンサーが欲しいです。全国のろう学校の部活に柔道部が出来れば建設してほしいです。

- ・デフリンピックをもっと世間に広めたい。そうすれば、聾者のメンタルが高めると思います。スポンサーが多く来ると思います。

- ・オリンピックやパラリンピックのように、もっとマスコミの力を利用して、世間の人々へ浸透化を図りたい。(デフリンピックに向けて、候補選手など、モチベーション向上へつながる)

- ・デフリンピック知名度はまだ低い。もっとPR 活動してほしい。遠征費、合宿費などについて私達は仕事があるので、スポンサーの交渉は、ろうあ連盟の方がやってほしい。また、報道は積極

的に報告してほしい。オリンピックのユニホームは、デフリンピックも同様に用意してほしい。

・オリンピックとパラリンピックと同様に国民に知ってもらうためには、マスコミなどに取り上げてもらう必要があると考えられる。また、地域密着化することにより、地元からの応援を得てもらうのも良いと思う。将来的にデフリンピックを日本で開催してほしいという願望もあるが、私たち選手達が必死になって「デフリンピック」の知名度を上げていくのも良いのではと考える。

・世間ではデフリンピックの知名度が低いので、競技人口やスポンサー、関係省庁・関係団体の経済力に影響があると思います。（競技人口減少、補助金減少？） 広告や宣伝活動でもして知名度を高めて欲しいと思います。

・デフリンピックの知名度が低いので、もっとマスコミ等に取りあげてほしい。プロ選手を養成してほしい。

・日本でデフリンピック開催！ 知名度を 2.8→100%！これがあれば全然違うと思います。そして、一年間休みをもらって毎日一緒にバレーが出来れば金メダルは間違いないです。

・デフリンピックの知名度が低いので、パラリンピックと同じようにアピールして欲しい。特にデフリンピックやっていることを TV で放映して欲しいです。

・デフリンピックの知名度を上げていくために、我々が力を合わせて色々(たくさんの)な人に知ってもらいたい。障害者スポーツの普及にあたることであれば、何でも協力したいと思っています。

・デフリンピックの知名度が低いので、もっと PR して欲しいと思う。パラリンピック出場の時、スーツ着用しているのに、デフリンピックは何故付いていないか、不公平という気がする。

・デフリンピックの内容とかもっと TV で放映するともっと理解してもらえんと思います。

■【聴覚障害者の文化として理解を】

・サッカーや聴覚障害を通じて理解を深めていきたい。

・デフリンピックが単なる障害者の大会ではなく、ろう文化を持つろう者による大会であるということを少しでも多くの人に知ってもらいたい。そして聴力障害をもった子どもとその家族に希望を与えたい。

・もっとマスコミにデフリンピックの存在を知ってもらい、その上で一般の方々にデフリンピックがあることの理解及び応援頂きたい。また、健聴の学校にいる聴障者はデフリンピックがあることを知らない子が多いので、教育関係にも広まってほしい。

・今、ろう者としては厳しい社会になっていると思う。人工内耳を付ける人もいるし、ろう学校やろう教育のあり方も混乱している所があるだろうし。その中でも、スポーツを通して様々な人が交流できれば、そして同じ目標(デフリンピックとか)を持って共に壁を乗り越えていくことでろう者としてアイデンティティを持てるようになるのではないかなと思う。スポーツを通して平等を！

・デフリンピックが聴覚障害者の皆さんにとって励みの場(大会)であり続けたい。色々な意味でデフリンピックもパラリンピックもオリンピックも平等になって欲しい。これには時間が相当かかるだろう・・・。

■【子どもたちのために】

・将来の子どもたちの夢のためにも、もっとアピールしていきたい。健聴者たちにも、もっとデフリンピックの知名度を上げたい。

・まずは、パラリンピックと対等にデフリンピックの知名度を高めることが大事！！デフリンピックのアピールが日本に知れ渡ってから整備など充実してもらうことも重要だと考える。子どもたち(聴覚障害、健聴など)のためにも道を大きく広げていくことが夢なので、頑張りたい。

・子供達に夢を与えたい。(将来デフリンピックに出る気持ちにさせる)

・人工内耳の拡大により、ろう者スポーツ選手が減少しそうで不安なので、もっとスポーツ世界を表に出して、ろう者とろう者の子供を持つ親にスポーツの良さを理解してもらいたい。

・聴覚障害を持つ人々がスポーツをする上で不便なところは、少なからずあると思う。でも、身体は不自由なく動かすことができる。体力、技術、メンタルでカバーして健常者に勝つことはできる！そう信じたい！それを聴覚障害をもった子供たちに伝えたいです。

・「デフリンピック」の知名度が低いので、今度、高く為には、広告を行う際の情報を伝達する媒体には数種類があります。主な媒体は次の5つである。①新聞広告 ②雑誌広告 ③TV 広告 ④ラジオ広告 ⑤交通広告。うまくいくと、スポンサー増していくと思われます。まず、宣伝活動のスタートしないと始まらないと思います。(夢を持って子供達に与えたい。)

■【もっと仲間を】

・女子サッカーを知っている人がまだ少ないのでもっとみんなに知ってほしい。デフリンピックでもちろんメダルを取ることが今の大きな夢です。

・フットサル、ビーチサッカーの競技も加入してほしいですし、環境の良い所でできたら良いなと思います。

・デフリンピックに「野球」があったらいいな。兄貴が野球をやっているの、トップレベルの中で活やくしている姿を見てみたい。ビーチバレーの仲間が増えたらいいな。

・カーリングを愛する聴覚障害者が増えて全国聴覚障害者カーリング大会が開かれたらいいと思います。

・バレーの人数がへってきているので増やしたい。(若い世代)

・練習(合宿)時の自己負担が減ること。もっとデフリンピック、デフバスケの存在をマスコミなどを通して広めることで若くて優秀な選手が集まってくることを期待したい。まだまだ知名度が低いので・・・。

・「デフリンピック」という知名度が低いので、アピールを強くしていったらより多くのろう者達に情報が伝わればと思っています。(どんな競技があるのか、実際にデフリンピックに参加しないとわからないものがたくさんありました。)

■【環境整備を】

・デフリンピックに行くには、メダルを取るためにあるから監督、コーチは、プロ経験のある健聴者が一番ふさわしい。合宿にも同行、試合も同じ。

・メダルだけでなく賞金も付いてほしい。

・人間はすべて公平に支援すべし。

・まず、金メダルを取ることを目標として今から書きます。金メダルを取ることが出来る環境が整っているか？中途半端に支援するよりも国は健聴と同じ様にサポートするべきだと思う。環境が全てではないが自己負担してきたものをもっと自分の身体に使えたら、これ以上の事を求めることはない。ホリスティックコンディショニング協会のトレーナーを選手につけるべきだ。普通の治療家さんをトレーナーと呼んでは身体が外国で戦える状態にならない。

・デフリンピックをぜひ日本で開催して欲しい！アメリカのNBAにはろうの選手がいました。日本のプロバスケットにもろうの選手が将来出てきたらいいな・・・と思っています。日本にはまだそうなるための見えないかべがあるように思います。

・聾学校とデフスポーツとは密接な関係にある。聾の先生でもあり、デフアスリートでもある人には、学校全体として環境、支援などサポートする必要がある。今はまだまだそのレベルに達していない。

・放送。オリンピック、パラリンピックは世界中に放送できるが、デフリンピックはなぜ放送しない？

・行政、国の理解が必要(最優先！！)。また、競技人口を上げるために、地域の支援学校(聴覚)との連携が大切になってくる。選手と一緒にプレーしたり、教えることで存在を知り、目標となれば良いと思う。健聴のバレーボール団体との関わりも大切。自分も、対戦相手になるまでは、存在すら知らなかった。もっと、難聴でも健聴でやっている選手が多いので、その選手をスカウト、知名度(デフバレーボール)のupをする方法を考える必要がある。例えば、インターハイや春高バレー予選、バレーボール協会と密接に協力体制を作り、選手の発掘ができれば・・・。 ナショナルトレーニングセンターの使用。

・昨年の熊本大会に行こうと思ったんですが、高校の大会が重なっていたため行けませんでした。行けなかったのがポイントが「0」でした。台湾へ行けると思っていたんですが、ポイント不足で補助になってしまいました。残念で、悔しいです。高校の大会など、重ならないようにお願いします。デフリンピックの代表と強化合宿の時、いいコーチがあれば、ありがたいと思う。

・オリンピック、パラリンピック、デフリンピック合同(同時)開催を！！

・特に全国ろうあ者体育大会の出場年齢制限が限られている為、若い人の意識向上、又は技術向上が遅れているのと進歩がみられていない。専門的なコーチの指導により、意識、技術向上に繋がると思います。

・今回のデフリンピックは、集大成したい気持ちが強く、メダルを獲りたい。でも選考についての基準があいまい。監督コーチを選ぶ権利がないのでその辺をなんとかしてほしい。四年前に落選した理由もなく、本部にたずねても教えてくれなかったので本部の運営をしっかりとしてほしい。

・ランク(レベル)によって専任コーチの派遣費を設定して、選手1人1人がいい結果を出せる環境を整えて欲しい。普段の練習を指導してくれている専任コーチの派遣は選手の状態や選手が最高のパフォーマンスを出す為のコンディション作り、メンタル、全てにおいて把握しているし、必要なことだと思う。オリンピックはメダルに近い選手は専任コーチを出しています。費用が大きな問題

となると思いますが、そういった働きかけを促すことで日本全体のレベル up につながると思います。

- ・手話出来る監督・コーチ・トレーナーを用意して欲しいです。また、国際手話できる+英会話できる要員がいればとても嬉しいです。

- ・今後の目標としては、ろう者の国内トップ選手のレベルを、オリンピックの代表選手と遜色ないレベルまで上げることです。その為には、第一に指導者と十分なコミュニケーションがとれる環境を作る事だと私は思っています。必要な事は、スポーツ用語に精通した手話通訳の育成及び、ろう者のスポーツ指導者の育成です。現時点での国内トップのデフアスリートも大切ですが、10年後を見据えて子供たちの育成も大事。子供たちに十分なスポーツトレーニングを与える為には、上記にあげた「指導者との十分なコミュニケーション」が一番重要だと思います。選手のレベルが上がれば、世間も注目します。世間が注目すれば、スポンサーもつきやすくなります。資金が潤沢になれば、指導者や通訳の育成に予算をつぎ込めます。道は険しいですが、ぜひ実現したいです。

- ・できるだけ選手の負担軽減。→軽減できれば、モチベーションの向上につながり成績アップ期待できる。

- ・1年間特別休暇をもらって全員一緒にバレーをするがよい。金メダルとれる。

- ・皆と練習できるかんきょうを増やしたい。メンバー用寮があればうれしい。

- ・オリンピックのようにみんなと一緒に暮らして、デフリンピックに向けて、毎日バレー練習できる環境があったら良いなと思っています。

- ・海外の選手(聴覚障害者)は半分以上がプロアスリート(障害者)と聞いています。オリンピック選手だけではなくデフリンピック選手も平等で国からスポンサー(支援)を出してる所が多い。しかし、日本はプロアスリート(実業団など)でも一般者だけ認められる所はあるが、障害者はなかなかなくて、練習環境に恵まれない所が多い。できるだけ、トップアスリートである聴覚障害者がいたら、一般者だけではなく障害者プロアスリートも導入してほしいと思います。つまり、海外のように平等になってほしいと思っています。

- ・スポンサーがほしいです。なぜなら、選手たちの金銭的負担だけでは無理があり、旅費や滞在費などかかる費用がばかにならないため、スポンサーによる金銭的、物質的支援があれば選手達は競技以外のことに精神を使う必要がなくなるからです。

- ・デフリンピックもパラリンピックと同列の扱いとしてほしい。

- ・デフリンピックには出たことないので、様子がわからないが、国際へ出発、帰国の際にスーツがないのが気になる。国際大会に出ることは国として背負う意味もあるので、日本人としての自覚を持たせるためにも、スーツは着用した方がよい。(ジャージで移動するのは非常にダサイと思うからやめたほうがよい。)

■【その他】

- ・スポーツしている聴覚障害者のため、プロ選手、大きな経験人と交流または色々なことを学びたいと思っています。私はろう日本代表になっても、情報不足で大変なことがあったのです。

- ・デフリンピックでメダルを取るように頑張りたいと夢です。落選しないようにそのままに続けたい。

- ・金メダルを取りたい気持ちはあります。
- ・デフリンピックの初出場だから、目標は金メダル取れるように頑張りたいです。
- ・メダル取得すること。
- ・デフリンピックはもちろん2連覇ねらいます。それまでは健聴者と楽しく一緒にがんばって練習します。
- ・デフリンピックでメダルを取りたいです。現在のブレの日本ろう者記録をすべてぬりかえたいです。
- ・筑波技術大学に入って、水泳をやってデフリンピックで金メダルをとりたい。障がい者スポーツに理解のある会社に入り水泳を続けたい。
- ・2009年9月デフリンピックに向け、悔いのない成績を残せる様な試合をして結果を出したいと思っています。今後、聴覚障害に限らず障害の方々に接する機会があれば、トレーニング理論については是非実践し、自分が今迄経験したことをいかして、監督、コーチ、スタッフ等にたずさわリメダルを1個でも多くとれるよう努力したい。